

八<sup>や</sup>

幡<sup>はた</sup>

川<sup>がわ</sup>



河口の先には浅黄色の安芸の海が広がっている。

春は、島依いにやってくる。景弘は、馬の鞍くらの上で背伸びするように体を伸ばし、柔らかな朝の光に満ちた内海を眺めた。馬上から眺める景色は、普段の地上からの眺めとは違って見え、扇形に広がった浜の眺望に、少年の景弘は深く息をついた。

「この瀬戸内の海が、どうして温かく見えるか…」

景弘は、そう父に問われたことがあった。

「それは、どこを見ても人の暮らしが見えるからじゃ」と、父は諭した。

「命の温ぬくもりのある内海…」

父は、景弘に、そう告げた。

十二才を迎えた景弘が、元服をしたのは、この春先のことであった。

元服の祝いに、景弘は、父の佐伯頼信よりのぶから若い駿馬しゅんめの「はやせ」を貰もらい受けていた。

「はやせ」は、早瀬。この安芸の海の島嶼とうとうを流れる潮の、狭い島間の干満による急湍きゅうたんを早瀬と呼んだ。名のとおり、「はやせ」は、少年の景弘を軽々と背に乗せて、河口の浜の渚なみさとを翔とぶように駆けた。

景弘は、馬に乗ることは佐伯の侍のあかしと、そう自分に言い聞かせていた。

「馬を得て、お前の歩みのかぎりも増え申そう」

父がそう諭したことは、自分のおこないや行動範囲についてのひろがり指していることを、景弘は賢く悟っていた。

「男の元服には、任に当たりて、それを全うする責というものが生ずる」

と、父はいう。

馬上六尺の高さからの眺めに、景弘は、視界の広がりだけでなく、父のいう「あゆみのかぎり」の広がりにも重みを感じた。

東に佐伯山。西に極楽寺山。

この二つの山塊に挟まれた僅かな平野部に、八幡川の河口はあった。

幼いころから馴染み深い八幡川は、上流から運んでくる砂泥の堆積によって狭いながら肥沃な土地が山裾まで広がっていた。春から夏にかけて鮎や山女が河口近くまでやってきて、ウナギやハゼなど河口の汽水域から遡ってくる海の小魚もいた。

八幡川の源は、一つは西方の阿弥陀ヶ山伏谷に、もう一つは極楽寺山の峰深くから流れ出る無数の細流に辿ることができた。

景弘は、佐伯山の朝夕の日に照らされた山肌の色と山容に、少年ながらいつも感動を覚えた。

佐伯家は、嚴島神社創建以来の神主家であり、この地の郡司である。

景弘の父、佐伯頼信は、安芸国の西域の広大な地を支配し、国司を扶け、貢租を取り立て収めることが役目であった。

頼信が神主を継いだころ、佐伯郡は東西に分けられ、このあたりは佐西郡となったが、頼信は自分の名前である「佐伯」の地名に強い誇りを持っていた。

景弘の生家がある三宅は、極楽寺山の東麓で両側に谷川があり、その水路は付近の漁師たちだけでなく、穀物蔵（屯倉）への物資の搬出入に使われた。

丘の緩い斜面にある館には、父頼信が統率している佐伯軍団が集結することもあり、広大な地所に囲まれていたが、周囲には深い森があつて、それは背後の極楽寺山の高みに続いていた。春には山霧が纏い、その麓の合間に山桜の仄かな紅が垣間見えた。

三宅の館から巖島は眼前に見えた。

大野瀬戸を隔てて海峡の向こうにある巖島は、周囲七里余り。霊峰弥山は峻険な形で頂付近の大岩は、神が鎮座しているとところで「磐座」とよばれる。

島の海峡側の麓にある古い社は、弥山を遥拝するに最もいい場所として選ばれたと、父の頼信も信じていた。頂から流れ落ちる滝川や御霊川、そして大元川の河口に開けた砂浜は、船を着けるにも都合のいい場所であつた。

「古くは、神社は社殿を持たず、聖地に神を迎えて祀りをしたもの：」  
景弘は、父からそう訓えられていた。

「巖島神社の創建は、五百五十年前の昔。推古天皇の御代、我が佐伯家の祖である佐伯鞍職が、赤い帆の船に乗ってやってきた市杵島姫命を先導し、この地に鎮座せしめたもの」  
景弘は、この話が好きだった。

極楽寺山にも、四百年の昔、ここに行基が訪れたという言い伝えがあつた。

「全国行脚に出た行基さんは、この地を訪れ、大仏さんの建立のために、寄進を仰いで歩いた…」  
土地には、こんな伝説があった。

行基は厳島へ渡る舟の中から地御前の社の後背地の山に怪光を発するものに気づき、その山に登ると一本の大杉を切り倒したという。

極楽寺を創建した行基は、この巨木を材に十一面千手観音坐像を彫ったとされ、また阿弥陀像を四十八体彫刻し、それを担いで多くの信者に分け与えたという逸話もあった。

「この日から、この地に禍をもたらし続けていた災難は悉く消えた…」

八幡神社の美しい巫女であった母萌子は、「椿の前」と呼ばれた。

母は、椿原にある古い八幡神社の宮司の娘。

景弘は、幼い頃から小道伝いに母の里である八幡神社へ遊びにいった。

景弘が、日課のように八幡神社へ通うのは、父頼信の命で、この社の神官である田所の伊佐の許で、剣の修行を積んでいるからであった。

「田所の伊佐どの…」

剣の師である八幡神社の神官を、父頼信も敬意を表して、そう呼んだ。

伊佐は文武両道に優れ、弓矢と騎馬の腕は都にまで名が聞こえた武人として知られた。

この社の神官は母の兄。景弘にとっても、母方の伯父に当たった。

「田所とは、律令の頃の国衙の地方官の役職名で、田畑の検地役人…を指す」  
景弘は、そう父から訓えられた。

伊佐の名の謂れは明らかではない。「いさな」とは勇魚、鯨のことであり、その名は、郡司である父を扶けて余りある力の、その器量の大きさを連想させた。

佐伯家の先祖が、この地へやってくる前から、安芸地方の海辺には、多くの海人族が住み着いて漁労を糧に暮らしていた。

「あるいは、伊佐どのは海人族の血を引くものであったかも知れぬ……」

以来、佐伯家と田所家はよき主従として手を携え合い、郡司としての佐伯家を支えてきたことを、父頼信は、景弘に語って訊かせた。

八幡川の河口近くに、もう一つの流れが海に注いでいた。石内川という。この二つの川に挟まれた沃野の中に田畑に囲まれた利松と呼ばれる小さな集落があり、そこに郡司屋敷があった。

郡司としての務めに、父の頼信は、この館に馬で通った。

郡司の役務を力強く支えていたのが、田所の伊佐であった。

律令制の荘園は、国衙領の貢租高が割り当てられていたが、国―郡―郷という形がいつの間にか崩れてきて、郡や郷の司の中には、立場を利用して私腹を肥やすものや、収穫が悪化して貢租に苦しむものもでてきた。

そんな中で、佐伯頼信は、「力のある郡司」だといわれた。郡や郷の間の争いごとの收拾に、頼信は非凡な力を示した。

佐伯軍団とも呼ぶ侍集団があった。

父は、自領を守る兵士として組織されている「佐伯軍団」の長であった。

厳島神社の神主家の惣領である頼信は、安芸地方における部族間や郡・郷の争いごとくに睨みを利かせ、時には仲介役を買って出て紛争を解決の途に導いたりした。

特に船を使った戦が得意で、都からの要請があれば、すぐさま軍容を整えて合戦や鎮撫に馳せ参じた。

大野の赤人は、景弘が幼い頃から屋敷に出入りしていた下人の一人で、厳島対岸の大野の浦里で漁をして暮らしている男だった。

父頼信よりも年下だが、名のとおり赤銅色に日焼けした肌の、鋼のような強靱な体の寡黙な男は、景弘にはひどく老成じみて見えた。

「若。沖へお供仕りましょうかい」

塩を噴いたような錆色の声で、赤人は、景弘を厳島の沖へ舟遊びに誘った。

元は大野の浦里で魚介を漁る漁労者たちの長であった。

「この沖を、大昔、唐へ向かう船が通った」

唐へ向かう……という言葉の響きは、少年の景弘の胸中に、遠い異国の煌びやかな文物への素朴な思いを誘い出していた。

「この先の伊予灘にも海賊が居った」

とりわけ、二百年前の瀬戸内の海賊の棟梁となった藤原純友らが跳梁した頃の、冒険物語や討伐の手に加って活躍したという先祖の誰彼の話に、幼い景弘も胸を熱くしていた。

「平忠盛……」

景弘は、その名を父からも聞かされていた。二度に渡る瀬戸内の海賊退治に父頼信に率いられた赤人た

ちも出動し、共に戦ったという。その生々しい手柄話は、それを語る赤人の胸にもまだ新しかった。

頼信は、日ごと景弘を連れて地御前の浜から小舟で厳島へと渡った。

雨の日も晴れた日も暑い夏の日も寒い冬の最中でも厳島へ通う日は続き、幼いころは脆弱であつた景弘を少しづつ逞しくしていた。

「日の恵みを受けて子どもは育つ…」  
と母はいう。

地御前の浜に苦家を貰い受けている船頭の赤人に言いつけ、頼信は景弘に操船を覚えこませ、それは小さな島が点在するこの海域に跋扈する凶族たちとの争いにも、海の軍団の指揮官として合戦に役立たせようという父の配慮からだつた。

景弘は、近辺の集落の子どもたちと徒党を組み、これを率いて野山や海辺を舞台に群れ遊ぶことに興じていた。

景弘の腕白ぶりは、時として目に余ることがあつた。付近の田圃で半日子どもたちと相撲を取つて過ごし、田の主から苦情を申し入れられ、父も困惑することがあつた。

ある日、八幡川の河川敷に放牧していた牛の尻尾に火の点いた藁束をくくりつけ、驚いた牛が、村道を駆け抜け、千回から屋代、佐方まで狂い奔るといふことがあつた。

この時ばかりは、父は景弘をきつく叱り、しばらくの間謹慎を申しつけられたりした。

「若さまは、乱暴者だけではありませんぬ」



そう告げたのは、子どもの母親たちであった。

それは、八幡川が夏のあらしに氾濫し、田畑を水没させた時のことであった。景弘は子どもたちに手伝わせて体に荒縄を巻きつけると、流れる水の中に踏み込んでいき、洪水に流されてくる田畑の作物を掴むと、子どもたちに声をかけて綱を引かせた。流される実りに呆然としていた田畑の主は涙を流して歎び、子どもたちに取り戻したその収穫を分け与えたりした。

多感な少年期を迎えようとしていた景弘は、子どもの頃の遊びで培った統率力が、思慮深さを加えて、後に父を継いで佐伯軍団の長として大きく花開いた。

「厳島には、子どもたちだけで遊びにいつてはならぬ」

と、景弘は母から堅く戒められていた。

父の供で通う厳島は、島の全体が神域だとされ、その神慮に満ちた島山の自然の中で、子どもであつても景弘は孤独な身を託っていた。孤独は、少年にモノ思ふ習慣を身につけさせ、それは早熟な感性や思索の質を扶植していた。

祖佐伯鞍職が創建した厳島神社の古い社は長年の雨風に晒され、社殿のあちこちは傷み破損していた。

「ここ厳島は年毎に吹くあらしの通り道で、恐ろしいのは、百年に一度やってくる天地を覆すような大あらしじゃ」

と、父は告げていた。

それに耐える頑丈なつくりの神殿を建てることを父が願っていることを、景弘は知っていた。

「はやせを船に乗せて敵島へ渡らせたい」

景弘は、父にそう願ひ、許されていた。

景弘が、ひとり馬で敵島の荒磯をめぐり、深い自然林の中や険しい山稜を踏破したのは、この日からであつた。

はやせと共に景弘は、島のいきものの息吹を敏感に感じ取り、太古から人の足を踏み入れることのなかつた神域に戦きながら五感を澄ませた。景弘にとつて敵島の峰々と深い谷間や鬱蒼と茂る森は、人智を越えた神慮に満ち、時として恐ろしく立ちほだかり、あるいは限りない安息と和み、そして生きものの営みを感じさせた。

景弘は、遊び相手の子どもたちに、敵島の深い森について語つて聞かせた。

「敵島も、われらと同じように、生きものじゃ」

神によつて生を享けた生きもの：景弘は、子どもたちにそういつて聞かせたかつた。

平良の浜から見える敵島は、もつとも美しかった。

父が願う厳島神社の造営について、景弘は、ぼんやりとだが、脳裡に浮かべていた。

「修復された神殿は、海に溶け込み、瀬戸内の船人たちや浦里の漁師や船頭などの航海の安全を恃み、父のいう暮らしの安寧や命の温もりを約束するものであつて欲しいものじゃ……」

景弘は、父の夢を叶えるために、自分もなにか役に立ちたいとしきりに思った。